ウズベキスタン南部 ファヤズテパ遺跡出土壁画の公表に向けて

はじめに　国際遺跡研究室は、2003年度からアフガニスタン・イラクおよび周辺諸国の文化遺産保護に関わる事業を東京文化財研究所と共同で実施してきたが、近年は中央アジア諸国への協力が中心となってきている。本稿では、ウズベキスタン南部のファヤズテパ遺跡で出土した壁画の公表を目的として実施している事業について報告する。

ファヤズテパ遺跡　ファヤズテパ遺跡はウズベキスタン南部のテルメズ市の北郊に残る仏教寺院址で、カラテパ仏教遺跡の北東１㎞に位置する。1968年から1976年にL. I. Al'baumによって発掘され、仏塔と長方形のプランを持つ僧院から成ることがあきらかにされた。簡単な報告が発表され、出土した壁画の線画や塑像の写真などの一部が公表されたが、正式な報告書は未発表である。2002年から2006年には、ユネスコ日本信託基金により、遺構の保存修復作業が実施され、Sh. Pidaev、Dzh. Annaev、T. Annaevによって追加の発掘調査がおこなわれた。最近では、出土した墨書土器の銘文（カロシュティー文字、ブラーフミー文字、バクトリア語）の研究が進められている。

仏教寺院として機能していた年代は、出土したコインと墨書土器によって推定されている。発見された65点ほどのコインのうち８割が、クシャーン朝（１～３世紀）のコインであること、また墨書土器の大部分は、銘文の書体から、１世紀前半から２世紀のものであることがあきらかにされている。このことから、寺院の創建は１世紀頃で、クシャーン朝期を通して大衆部の寺院・僧院として機能したが、５世紀前半には衰退し、その後、建物は遺体を納める墓として使われたと推定されている。ササン朝ペルシアの中央アジア侵攻を寺院の衰退と結びつける研究者もいるが、意図的な破壊の痕跡は認められないとして、ササン朝による破壊を否定する研究者もいる。

ファヤズテパ遺跡出土壁画　僧院は北西から南東にのびる長方形の平面で、内部は３つのほぼ正方形の区画に分かれている。中央部分（ブロックＢ）は、中庭を取り囲むように僧房が並び、奥の中央の部屋（Ｂ８）から保存状態の良い壁画が発見されている。部屋の左壁には蓮華の上に立つ仏陀とその両脇に立つ女性供養者像が、右壁には横一列に並ぶ９人の男性供養者が描かれていたが、上部は残されていなかった。入口の右側には２人の男性供養者の顔と上半身が残されていた。また、入口の外側でも、大きく描かれた仏陀の頭部、小さく描かれた仏陀の坐像、男性・女性供養者を表す壁画が見つかっている。

ファヤズテパ遺跡で出土した壁画の一部は、現在、タシケントにある国立歴史博物館に展示され、その写真も公表されている。しかし、Ｂ８の左壁と右壁から剥ぎ取られた仏陀と女性供養者の壁画、男性供養者の壁画は、簡単な描き起こし図（左壁・右壁）と彩色復元（右壁）、一部の白黒写真（右壁）が発表されているのみで、壁画の実物もカラー写真も公表されていない。

壁画の保存修復作業　2016年２月に、サマルカンドにあるウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所が保管するファヤズテパ遺跡出土壁画の予備調査をおこない、約35点の未修復の断片の存在を確認した。同年11月に、４点の比較的小さな断片に対して保存修復作業をおこなった。実際の作業は、考古学研究所保存修復室の室長Marina Reutovaと、室員のGulnora Ahadova、Gulbahor Pulatovaが、以下の工程でおこなった。

①彩色層を保護するために、表面をガーゼで覆い、その上からパラロイドB72アセトン溶液（20%）を塗布。

②断片裏面の下塗り層（粘土、0.5～1.0㎝）をメスで除去。粘土に含まれる塩が彩色面にダメージを与える恐れがあるため、できるだけ取り除き、かわりに、脱塩処理をした粘土とパラロイドB72アセトン溶液（15%）を混合して作成したペーストを塗布（厚さ０.３～０.4㎝）。

③断片内部に残る過剰な合成樹脂（発掘時に断片を強化するために含浸させたもの）を除去するために、キシレンの蒸気を充満させた密閉空間の中に断片を10日ほど置く。

④表面の欠損部を、脱塩処理した粘土とパラロイドB72アセトン溶液（15%）を混合して作成したペーストで埋めて平らにする。表面に付着した汚れをアセトンで緩めて取り除く。

断片に含まれていた過剰な樹脂を除去することで、表面に見られた不自然な光沢や暗色化が軽減され、図像

がかなり鮮明に見えるようになった（図11〜14）。図11の断片（33㎝×44㎝）は赤色の背景に女性の頭部を表し、図12の断片（48㎝×26㎝）は半裸の男児の全身像を表す。図13の断片（27㎝×54㎝）は青色を背景とし、赤色のキノコ状のものが三段に重なっている様子が認められる。これは、仏塔の上部に取り付けられた傘蓋の一部である可能性が指摘されている。同じような形状の傘蓋を持つ小型の仏塔が、ガンダーラの２〜３世紀の仏教遺跡から出土している。図13の傘蓋の下部には鈴のようなものが下がっている。図14の断片（12.5㎝×32㎝）にも鈴のようなものが見られることから、こちらも仏塔の傘蓋の一部であると推定される。これらは、ファヤズテパ遺跡の仏塔の造営年代や形状を検討する上で、重要な資料となるだろう。

今後の課題　今後は、上記４点の断片に支持体を取り付け、展示が可能な状態にする予定である。そして、断片のカラー写真と描き起こし図を公表する。すべて未発表の資料であり、中央アジア初期仏教美術の研究に寄与することが期待される。今後も中央アジア諸国の文化遺産保護を目的とした協力事業を継続していく予定である。

なお、本事業は、文化財保護・芸術研究助成財団の事業助成を受けて実施した。記して感謝申し上げる。

（影山悦子・Berdimuradov Amridin／ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所・**Kazim Abdullaev**／イスタンブール大学**）**

参考文献

加藤九祚『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』シルクロード学研究４、1994。

Lo Muzio, C., “Remarks on the paintings from the Buddhist monastery of Fayaz Tepe (Southern Uzbekistan)”, *Bulletin of the Asia Institute* 22 (2008), 2012.

Pidaev, Sh., T. Annaev, G. Fussman, *Monuments buddhiques de Termez* I: Catalogue des inscriptions sur poteries par G. Fussman, Paris, 2011.

図11　表面クリーニング後の壁画断片１

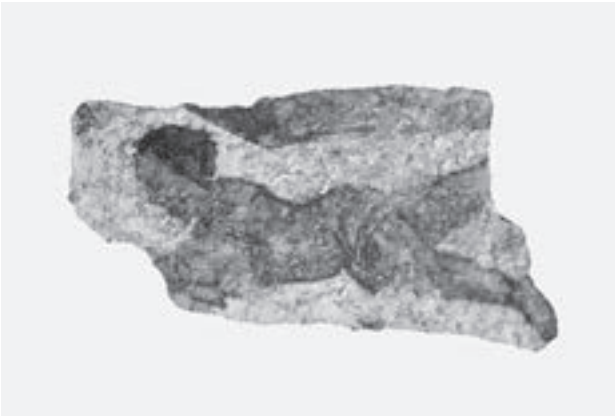

図12　表面クリーニング後の壁画断片２

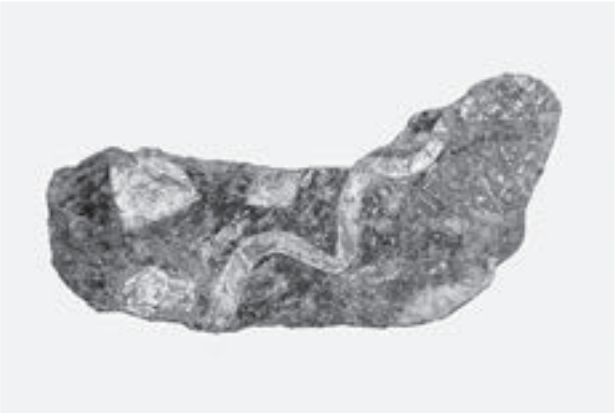

図13　表面クリーニング後の壁画断片３

図14　表面クリーニング後の壁画断片４